

【小説】MESSAGE

三澤未来

Prologue

誰もいない家のなかへ向かつて「ただいま」と、私の隣で和音が呼びかける。その小さな頭にほん、と右手を乗せた。わざと髪が乱れるように軽く撫で、「おかえりなさい」と笑いかけると、娘は届託のない笑みで私を見上げる。その両手に大事に抱えられている筒の中には、彼女が無事に義務教育の九年間を修了した証が収められている。私はまだ泣き腫らして真つ赤な目を再び涙で濡らさぬよう、努めて明るく話しかけた。

「さ、今日はお祝いだからね、晩ご飯は何か美味しいもの食べに行こつか」「やつりいー」

腰に手を当ててVサインを突き出すその姿は、古い写真に収められている幼い頃の無邪気な仕草と、なんら変わっていない。

玄関扉を閉める寸前に、春の薰りを連れて爽やかな風

が吹き込んできた。廊下を撫でて奥のリビングまで届くその風は、和音の長く綺麗な黒髪をふわりと舞い流した。細い中指で耳の後ろへ髪をかき上げる横顔に、子どもっぽいポーズとは対照的な女性の艶やかさを垣間見て、思わずどきっとさせられる。

どこか遠くを見つめるような表情に、夫の面影が一瞬重なつたのは、私の心が胸の高鳴りと恋のときめきを混同したせいだけではないはずだ。

——やつぱり、どこか似ているのね。

わざかの間の邂逅。刹那、胸にある決心の芽が吹いた。

「和音、一つお願ひがあるんだけど」

「今日、式で弾いた曲、もう一度お母さんに聴かせてくれない？」

母と子の二人暮しには分不相応なほど立派な、黒光りするグランドピアノ。楽譜の収められた本棚とだけで、それほど広くない部屋の大半は占められている。片隅に、

ダイニングテーブルとセットの椅子を一脚押借した、私が専用の観客席がぽつんと佇んでいる。その背もたれにゆつたり体を預けた。

——一張羅に皺が寄ることを気に留めないなんて、女として失格かしら。

唐突にそんなことが思い浮かぶ。今日はなぜだか思考がジャンプすることが多いようだ。疲れているのだろうか。心配屋の娘に聞こえないよう、小さく溜息をついた。制服のスカートを膝裏へ綺麗に揃え、静かに和音がピアノの前に座った。たおやかな腕が鍵盤に伸びる。薬指が、そつと触れる。

始めの一音が響いた瞬間、弾かれたように顔を上げた。娘は、壇上から卒業式場を包み込んだボップスのアンジ曲ではなく、優しい微笑を浮かべながら、私がこの世界最も愛している曲を奏で始めたのだ。

部屋に満つる『大きな古時計』のメロディ。

私は驚くことも忘れ和音が紡ぎ出す繊細で優しいハーモニーに身を、心を、すべてを委ねた。

最後のフェルマータが余韻を残してふつりと溶けた後も、しばらく身じろぎ一つできないでいた私に向かつて、

「野々宮志穂様と和音様ですね、どうぞこちらのお席へ」

若草色のワンピースに身を包んだ和音が、案内された

和音はおどけた表情で舌をペろつと出した。

「ごめんねお母さん、リクエストとは違う曲、弾いちやつた」

そして、呆然と見つめる私を尻目に、ピアノと本棚の隙間に体をねじ込み、その陰で死角になつていた部屋の隅から、ささやかだけどあたたかい色合いの花束を、和音は取り出してみせた。

「あんまり使つた覚えはないんだけど、思つたほどお小遣いが貯められなくて、こんなのしか用意できなかつたんだ。今の曲とセットつてことで、勘弁してね」

「はい、お誕生日……」

胸が詰まり、耳がつんと鳴つて、最後のフレーズははつきりと聞き取れなかつた。

せつかくの贈り物を潰してしまわないよう気を遣う余裕があつたことに、自分自身感謝すべきだろう。力の限り和音の体を抱き締めると、その綺麗な髪に涙がぼた、ぼたと跳ねた。

テーブルを挟んで向かい側に腰を下ろした。楽しそうに

きよろきよろと辺りを見回すその大きな瞳は、つややかで澄んだ黒色に煌めく照明を映している。いくらお祝いとはいえ、生演奏のジャズが心地よく響くようなホテルのレストランは贅沢すぎるかとも思ったが、自分の誕生日祝いも兼ねてということで勘弁してね、と天井に向かつて手を合わせた。ウッドベースのリズムに合わせて体を揺らしていた和音が、不思議そうに首を傾げる。

注文を取りにきたウェイターにコース料理を二人分と飲み物を頼んだ。アルコールを進んで口にするのは久しぶりだ。娘は少し羨ましそうな顔を見せたが、大人しくフレッシュジュースの入ったコップを掲げた。

「お母さんの誕生日に」

「和音の中学校卒業に」

ちいん。ささやかに響く音。口当たりのよいシャンパンが、するりと喉を抜けた。

「……今日は、少し思い出話に付き合ってね、和音」

私は、普段持ち歩くものよりも大きめのセカンドバッグから、小さな紙箱を取り出した。向かいのテーブルに置き、開けるように促すと、恐る恐るといった感じで和音が蓋に指をかけた。

「…………遅い」

壁掛け時計を睨みつけながら呟いた。静かなリビングに、怒気を含んだ自分の声が驚くほど響く。傍らで小さな握り拳が、もぞりと動いた。さつき飲ませたばかりと思っていたのに、気がつけばもう十時を回っていた。

（もう、三時間経ったのね）

1

浮気実態についてひとしきり演説をぶたれてしまつた。口を挟む間などどこにもないせいもあって、ほぼ全部を聞き流していたけど、その冒頭の一文が針となつて胸に突き刺さつていたようだ。

諂いの原因はいつも決まつていた。
私が追えなかつた夢を、娘に託したい。
ただ一つのその願いを、真史にどうしても受け入れてもらへなかつた。
自分の右掌を見つめる。何の変哲もない、だからこそ大嫌いな手。
そつと和音の背中に戻すと、柔らかなあたたかさが伝わってきた。

程なくして、和音の口から細い泣き声が漏れてくる。壊れ物を扱うようにそつと抱き上げると、目をつぶつたままでその唇が乳首をうろうろと探し出した。何度も見ても口元がほころぶ仕草。

——それにしても、遅いわね。

今度は口に出さずに、ただ玄関のほうへと視線を向けるにとどめた。幸せそうに母乳を飲む娘の顔を見て、気持ちを落ち着ける。

年が明け、国語教師である真史が受け持つ三年生は追い込みモードに入りしているはずだ。生徒も教師も多忙なシーズンを迎えていることは承知の上だが、ここ最近の帰りの遅さには、何かしらの不信感を抱かずにはいられない。

（この子を授かつてから、喧嘩ばかりしてるなあ）

ぽんやりとそんなことを考えたのは、昼間耳にした一言がどこかに引っかかっているせいだろう。

——お宅のご主人、お勤めの高校の若い音楽教師と、随分仲がいいらしいわよ。

どこの町内でも必ずと言つていいほど一人はいる噂好きの奥さんに、和音の散歩の途中で顔を合わせるなり呼び止められて、その言葉を皮切りに最近のご近所一帯の

小学校の頃、近所にとても仲のいい友達がいた。その子の母親はとても厳しい人らしく、自宅に遊びに行くことは一度もなかつたけど、同じピアノ教室に通つていたので、そこでは笑いあつて連弾したりしたものだつた。いつか二人で超有名なピアニストになろうね、と約束したことがあつた。

初めての発表会を一ヵ月後に控えたある日、数日前から課題曲のワンドレーズに詰まつて悩み落ち込んでいる

彼女を心配して、学校の音楽室に様子を見に行つたことがある。入り口の隙間からすり泣く声が聞こえてきたので、そつと部屋を覗いた時、驚きのあまり声も出せなくなつたのをよく覚えている。

彼女は、震える手でカツターナイフを握り、指と指の間を自分で切り裂いていた。

左手は既に血まみれになつていて、用意していたと思われるタオルもどす黒く染まっていた。

絶叫してもおかしくないほどの痛みを、彼女は何もかも押し殺して耐えていた。腹痛を堪えるようにぐうつとうずくまり、タオルを巻きつけた左手を丸めた体に包み込んで背中を震わせる姿を、しばらくも直視できずにその場を逃げ出した。

指の開きが小さいせいで、一オクターブが同時に弾けない。そのせいで技術が伸び悩み、母親に相当なじられたらしいということを、私は後で知つた。それ以来、ピアノの前に座ろうとするとき、彼女の背中を思い出して全身が震えた。鍵盤を叩くたびに、自分の小さな左手からも血が噴き出すイメージに襲われて泣いた。少し楽譜が読める程度の知識をつけることしかできないまま、身を切る思いで私はピアノを辞め、近寄りがたくなつた彼女

とも疎遠になつた。
その後、あの子が本当にピアニストになつたのかどうか、私は知らない。

いつの間にか、和音の口は私の胸を離れていた。普段なら満足したまま赤信号を無視して横断歩道に突つ込んだらしく。しかし葬儀の席で、目の前で号泣しながらひたすら土下座と謝罪を繰り返していたはずの運転手のことを、私はまったく覚えていない。ただ、父を永遠に失つたことすらわからない和音を抱き、読経もお悔やみも励ましもすべてを遮断して、夫が夫でなくなる様を呆然と見送つていた。和音が泣けば部屋にこもって授乳をし、終われば遺族席に座り込んで俯く、その繰り返しで時間

は過ぎていった。
誰が写真を選んでくれたのだろう。遺影の中の真史は、滅多に見せない素敵なお顔を私に向けてくれていた。

顔を上げるまでに、十回近く私自身を呼んでいたらしい。いつからか目の前に、ハンカチを携えてしゃくり上げる若い女性が立つていた。細かいウェーブのかかつたロングヘアが、鼻をするたびに小さく揺れている。涙でぐしやぐしやになることを予想していたのか、化粧つ氣のない顔はそれでも整つており、素直に「綺麗な人だな」と思えた。こんな時でなければ、愛らしい瞳につけられて微笑みを返していたかもしれないのに。

「ご主人と同じ高校に勤める音楽教師の、千谷崎^{ちやざき}と申します」

そう名乗つた女性は、通り一遍ながらも心底からのお悔やみと、生前笠松先生に大変お世話になりました、とのお礼を何度も繰り返し頭を下げた。そして、ぼんやりした頭に、千谷崎さんの澄んだ声が響いた。

「こんなばたばたしている時に大変申し訳ないのですが、奥様、少しだけお時間を取つていただいてよろしいですか？」

「実は、笠松先生は一年ほど前、わたしにあるお願ひをしてきました」

本当は誰にも黙つておいてほしい、と言っていたんですけどけれど、状況が状況なので、と前置きして、千谷崎さんが口を開いた。式場裏手の控え室兼休憩室で、寝ている和音をベッドに寝かせておいて、私は熱いお茶の入った湯飲みを両手に包み込み、冷えた手に血を通わせた。

「お願い……？」

「はい。私の父はとある会社でオルゴールの製作に携わっているんですが、そのことを笠松先生がどこから聞きつけたらしく、わざわざ音楽準備室に足を運んでこちらに来られて、こう言われました。

『あの、自分でオルゴールを作るのって、難しいんですね？』って

オルゴールを、作る？ 疑問符を顔に貼り付けた私が向かい、彼女は続ける。

『オルゴールには二種類の作り方があります。一つが機

械を使って同じものを大量に作る方法、もう一つが編曲やピンの埋め込みを手作業で行なう方法です。

大量生産の場合、プレス型を使つて金属板に突起を作り、それをくるつと巻いて『ドラム』と呼ばれる部品を作ります。この突起が、音を出すための歯を弾く役割をしているのですが、手作業の場合、ドラムの芯の部分にあたる金属製のシリンダーに一つ一つ穴を開け、そこに突起となる細いピンを埋め込むのです。

作業それ 자체は難しいものではありませんが、最も困難なのが『編曲』です。オルゴールでは歯の数、つまり出せる音の数が限られているので、どんな曲でもそれ用にアレンジを施さないといけません。笠松先生は『僕は音楽を聴くのは好きですが、編曲ともなるとそれなりに高度な専門知識が必要ですね。もしよろしければ、少しお手助けをいただけると大変ありがたいのですが』とおっしゃつて、私に協力を要請されたのです。

千谷崎さんは、遠くを懐かしむような目を見せた。私はまだ、話の先が見えていない。「希望する曲目は決められていましたよ」とおられる程度私がやらせていただきました。音数が増えると、それだけ作業も大変になりますので、ごくシンプルなメ

ロディと伴奏だけの楽譜を書いて、先生にお渡ししました。それを元に穴あけ作業に取り掛かられましたが、本当に忙しい合間に縫つて、少しずつこつこつと、丁寧に進められていきました。

そしてあの日、ようやくなんとか形になりました、と帰り際にご挨拶に来てくださった時、先生に聞いてみたんです。『そのオルゴール、どなたへの贈り物ですか?』

つづけ

彼女の目が、真っ直ぐに私を射た。口元には、柔らかな微笑み。

奥様、笠松先生は、その時に出産を終え母親となつてから一生懸命に作られていましたよ」

警察の人が遺留品の説明をしてくれていたはずらしいけど、自失状態の私の頭には何一つ残つていなかつたようだ。後日改めて遺品を調べていると、使い古した手帳や眼鏡ケースに混じつて、見覚えのない白く小さな箱があり、その中には、この箱を両手で抱き締めるようにして亡くなっていました。

真新しい仏壇に線香を供えに来てくれた担当刑事さんが、そんなことを言つていた。

震える手でその蓋を開けると、ショックを吸収するためのエアキャップに包まれた、掌サイズの木彫りの置物が現れた。台座の上の煎餅みたいな形のオブジェは、どうやら懐中時計を模して作つてあるらしいが、文字盤はあるのに針がない。底には、ぜんまいを巻くための円盤型のねじ。それをかりかりと巻き、そつとテーブルに置いていた。

ゆつくりと回転するオルゴール。ポロン、ポロン。かわいらしい音色が奏でるのは、私が初めてピアノで弾けるようになった想い出の曲だった。ところどころ調子外れな音が混じっているのは、手作りゆえの設計ミスなんか、それとも事故のショックは体を張つてでも防ぎ切れなかつたのか。

……おーおーきなのっぽのふるどけい、おじいーさんのーとけいー……。

素朴なメロディに真史の低く優しい歌声がふいと重なり、がらんとした部屋に自分の嗚咽が響いた。

背中のほうで、和音が楽しそうな笑い声を挙げていた。

*

「……それが……お父さんが最期に遺したのが、この

……オルゴール」

はらはらと零れる涙を拭おうともせず、和音は手にしたオルゴールを見つめた。色褪せはしているものの、あの日から一度も鳴らすことなく、仏壇にある真史の遺影の裏にしまつておいたからか、年月を経ている割には綺麗な状態を保つていて。

「……改築で一室を防音にして、立派なグランドピアノを買うことができたのも、お父さんの生命保険や賠償金なんかで余裕ができたからなの。お父さんがいなくなつたから、つていうわけじゃないのよ。お父さんからの贈り物だと思つて、ね」

私は手を伸ばし、和音の前に置かれた小さな箱を手に取つた。底から折り畳まれたメモ書きを取り出す。黄ばんでしまつてゐるそれを開くと、懐かしい真史の右肩上がりの癖字。

『和音が中学校を卒業する頃

この不完全なオルゴールを家族みんなで聞けることを祈つて』

遠い未来に向けたささやかなその願いも、残念ながら半分は叶わなかつた。今は二人となつてしまつた家族で、真史を想いながらこの音色に耳を傾けることが、彼への供養となるだろうか。

「聞いても……いい？」

時々しゃつくりを混ぜながら、和音が潤んだ目で私を見つめた。その顔にそつと微笑を返す。震える手つきでねじを巻き、テーブルの空いたスペースにオルゴールを置いた。

「ポロン……ポロン……。ゆつくりと懐中時計が回り出す。曲は途中から始まつて一回りする。その間にところどころ紛れ込んだ不協和音に、和音がクスッと泣き笑いを見せた。びつくりするほど几帳面な真史に似合わない、イレギュラーな音。私の知らない面を知つていて、調子外れの音符たち。

曲が最初から始まつた。和音がハミングでメロディを追いかけている。

「……？」
曲半ばで、緩んでいた和音の口元がきゅつと引き締まつた。鼻歌をやめ、手の甲で目をこすり、何かに集中するような仕草を見せる。だんだん前のめりになっていく

その鼻先で、真史のオルゴールはまだゆるやかに回り続けていた。

「どうしたの……？」

声をかけると、娘はようやく顔を上げ、さつきとはまつたく違う真剣な眼差しで、私の瞳を真つすぐに射た。

「お母さん、このオルゴール、壊れてなんかないよ」

そして私の鞄からボールペンをひつたると、左手の人差し指でリズムを取りながら、手近の紙ナップキンに何かを記し始めた。

3

「……それで、どういうことなの？」

一夜明け、のんびりとリビングに降りてきた和音に、朝の挨拶もそこそこに聞いてみた。昨日、レストランで何やら必死に考えていた和音だったが、「ただの私の勘違いだつたら恥ずかしいから、明日まで保留させて」と、その胸の内を口にする事はなかつた。オルゴールを箱ごと娘に渡したまま、悶々とした思いで一晩を過ごし、迎えた今日。和音はすつきりしたようなもやもやし

たような、複雑な表情を浮かべて私を見つめた。

「……お母さん、あのね」

「何？」

「あのオルゴール、やっぱり壊れてなかつた。でも、よ

くわからないから一緒に考えてほしいの」

まさか一晩中悩んでいたわけでもないだろうが、目の下が若干薄黒くなつていて。とりあえず頭を起こしなさい、とホットココアを用意した。ずずー、という行儀の悪い飲み方を軽く咎める。

「一体どうしたつていうの？ 壊れてないのがわかつたとかわからないとか……。お母さんには、和音の言つてることがよくわからないわ」

「うん。ちょっと待つてね、説明するから」

そうは言つたものの、休日の彼女の朝はいつものんびりで、パステルピンクのパジャマを桜色のスプリングセ

ーターと薄手のキユロットスカートに着替え、テーブルの向かいの席につき、幸せそうな笑顔でココアを飲み終えるまでしばらくかかつた。

「何から説明したらいいかな……。えつとね、あのオルゴールにところどころ入つてる『外れた音』なんだけど、あれ、偶然とか設計ミスでああなつたんじやなくて、わざと六拍半を保つて最後まで続いていた。

「…………」
「さと、そういうふうに作つてあるの」「え？」
「間違いないと思う。自信あるよ、これにはちゃんと根拠があるもの」
彼女が取り出されたのは、手書きの音符が並ぶ一枚の五線譜だつた。紙面上に数箇所、赤マジックで丸がつけてある。一小節目を指差して、和音が口を開いた。
「このオルゴール用に作られた『大きな古時計』は、『大きなつぼの古時計……』から始まつて『おじいさんが生まれた朝に買つてきた時計さ 今はもう動かないその時計』まで一回りする。それはお母さんも知つてるよね？」

「もちろんよ」

「それで、出だしの『おー』の音を含めて、全体で十六小節と一拍——計六十五拍あるけど、全部で十個ある問題の不協和音は、この六十五拍を正確に十等分した箇所に置かれているの。きつちり六・五拍に一音。こんな偶然、有り得ないでしょ？」

言われて慌てて五線譜を追う。私は我が目を疑つた。赤丸のつけられた十個の四分音符は、確かに最初の音からはずつと六拍半を保つて最後まで続いていた。

「和音、あなたまさか……昨日の夜、一度聴いただけでこれを見抜いたっていうの？」

驚嘆の眼差しで娘を見つめると、和音は腰に両拳をあてて胸を張り、得意げに笑つてみせた。我が娘ながら、その耳の良さには敬服するばかりだ。

「そう……でも、なんでわざわざお父さんがそんなことを？」

「ちょっと待つて。この仕掛け、本当にお父さんがやつたことだつて断言できる？」

「どういう意味？」

少し真顔になつた和音は、私のほうをちらりと覗き、わずかの間だけ言葉をためらつてから先を続けた。

「オルゴール用に作られた『大きな古時計』の楽譜は、お父さんと同じ高校に勤めていた千谷崎という音楽の先生が作った、って言つたよね。もしかしたら、わざと余計な音を混ぜて編曲したのは、その千谷崎先生のほうかもしだれないじゃない」

「何のために？」

「それは……その……うちのお父さんへの、愛の告白を織り交ぜた、とか」

虚を突かれて一瞬目が点になつた。ばつの悪そうな表

情で、和音が私をじつと見つめている。視線を受け止めながらしばらく思いを巡らせているうちに、その心配が杞憂であることが証明できるとわかつてほつとした。

「大丈夫よ、和音。それないとと思うわ」

「……どうして？」

「理由は幾つかあつてね。まず、その千谷崎先生が、このオルゴールを最初から誰かへのプレゼント用として作られていると認識していたこと。もしも、お父さんへ何らかのメッセージめいた暗号を送りたいとするなら、そのオルゴールは、自宅用、つまりお父さん自身の持ち物として作られていくなくてはいけない。他の人の手に渡つてしまつたら、その時点で仕掛けは意味を成さなくなつてしまふから。ここまでいい？」

言われたことを反芻しながら、和音は上目遣いのままでゆつくりうなずいた。

「もう一つ。これは手作りだからこそ言えること。完成したオルゴールを、お父さんが視聴しないわけはないと思わない？ 上手く曲が流れるのかチェックしたい」というのは、自分で作ったものならとても自然な感情だと思うの。で、聞けば誰でもわかるような明らかに不協和音が混ざつていれば、ピンを抜いたり切つたり折つたり

して、いくらでも修正できたはずよね。オルゴールの製造方法を考えれば、音の追加はともかく、削除なら簡単にできるみたいだもの」

「どう？」と口には出さずに、今度は私が自慢げにしようと首を傾げてみせた。和音の顔がみるみる明るくなる。両掌を合わせて「そつかあ……よかつたあ」と呟くのが聞こえた。

「何よ、和音。あなたもしかして、それを心配して一晩悩んでたの？」

それには答えず、えへ、と舌を出して肩をすくめた。

仕草もそうだが、その思考の流れがとてもかわいらしくて、思わず笑みがこぼれた。

「それじや話を戻しましょ。和音は、どうしてお父さんがあんなことをしたんだと思うの？」

「うん、さつきお母さんもちらつと言つたけど、私はその十個の音符がお父さんからのメツセージなんじやないかつて思つてるの」

五線譜が和音から手渡される。綺麗に並んだおたまじやくしの下、ページ最下段の余白部分に連ねられた十の音階を、一文字ずつゆっくりと読み上げた。

「ソ・ド・レ・ラ・ソ・シ・ラ・シ・ミ・ファ」

4

「……あと、この箱なんだけどさ」

私が五線譜から顔を上げるのを待つて、和音はオルゴールが入つていた紙の箱を差し出し、一つの面を指差す。全体に黄ばんだその箱の一面にくつきりと引かれている黒い線は、血のついた指で書かれたものだと後から知つた。

「ああ、それ。警察の人が、お父さんが亡くなる直前に書き残したものだつて教えてくれたわ。ずっと、私の名前を書こうとしたのかなつて考えてたけど」「つていうことは、お母さんも片仮名の『シ』だつて思つてたんだね」

一面全面に大きく引かれた三本の線。短いものが二本と、右上がりの長いものが一本。そう、理由はわからぬけど、真史が死の間際に私の名前——志穂の頭文字『シ』と書いたんだろうな、という漠然とした思いがあつた。

「まあ、無理すれば『ツ』と読めなくもないけど、最後

の一本が左下から右上に向かつて段々かすれてるところ
をみると『シ』の可能性が高いんじゃない?」

「うん、それは私もそう思う。けど、お母さんの名前を
書こうとしたんじやない、ような気がする」

紙箱と楽譜を渡して両手が空いたからか、和音はいつ
の間にか冷蔵庫からオレンジジュースを取り出して一人
で飲んでいた。コップから一口もらつて返し、先を促す。

「あのね、これ一面全体に書いてあるでしょ。お母さん
の名前は二文字なんだから、それを書くつもりだつたな
ら、これじや一文字が大きすぎるの。半分か、せめて三
分の一くらいのスペースを残しておかないと、二文字は
とても入らない。まさか他の面に書くつもりだつたわけ
でもないと思うし」

なるほど、確かに説得力はある。しかしそうなると、
別の疑問が出てきた。

「じゃあ、お父さんが一文字だけ書き残すつもりだつた
としましよう。だつたらどうして片仮名なの?『シ』
と書くくらいなら、平仮名で『し』と書いたほうが早い
し、わかりやすいと思わない?」

「うん……。きっと、片仮名の『シ』じゃないといけな
い理由があつたのよ。で、これも多分、お父さんが伝え

たいメッセージに何か関係があるんじゃないかつて、私
は考えてるの」

「どう、と同意を求めるように和音が前のめりになつて
私の顔を覗き込む。さらりと流れる黒髪の先が鼻に触れ
た。むず痒さに顔をしかめる。そのままの表情で首を捻
った。

「……わからない、わね」

ふうん、とため息のような長い鼻息を残して席に戻る
和音。二人して頬杖ついて、その間に鎮座したオルゴー^{ドレミファランド}ルを見つめる。

「昨日ね、色々考えてみたの。^階で書かれたものを、^{音名}に変えてみたり、^{C D E F G A B C}コードに変えてみたり。でもそのたびに『とはにいとろ――』とか『G C D A G B――』とか、全然言葉にならぬ文章になつてば

つかりでさ……」

和音は、私に話しかけているつもりなのかどうか、小
さな声で独り言のようにはそぼそと呟いている。

——あなた。

——私達に、一体何を伝えたかったの?

「……」

徐々に、和音の言わんとしていることがわかつてきいた。
「じゃあ、『不完全』なのは、そのオルゴールに隠され
たメッセージのほうを指して、いる……?」

その返事を待つまでもなく、和音は五線譜を裏返し、
もはや暗記してしまつたらしい十個の音階をそこに書き
写す。そして指折り数えながら、そのすぐ下に別の言葉
を書き始めた。

「そうか、だから片仮名じやないと駄目だつたんだ!」
歓喜を含んだ叫び声。何度も何度も指折り確認し、そ
の都度「うん、うん、絶対そうだ!」というような独り
言を繰り返しては納得の表情を見せる。

「ちよつと、どうしたのよ? 一体何がわかつたつてい
うの?」

「解けたのよ! お父さんが残した暗号が!」

「だつたら、このオルゴールが『不完全』つていうのは
矛盾してる。もしオルゴールがちゃんとできあがつてな
いんだつたら、誕生日ぎりぎりまで作り続けるのが普通
だよね」

「……そうね」
「ということは、オルゴールそのものはちゃんと完成し
てる」

Epilogue

「この不思議な十個の不協和音は、やつぱりお父さんか
らのメッセージだつたのよ!」
興奮して顔が紅潮している。椅子から転げ落ちそうに

なる娘をとりあえずなだめて席に着かせると、先を促すより早く説明が始まった。

「まずね、この階名で書かれた十個の音階を、全部音名にするの。さつき、昨日試した時には『言葉にならない文書になつてばかり』って言つたじやない。でもこれで合つてたのよ。で『ソドレラソシラシミファ』は『とはにいとろいろほへ』になる。

そこでさつきの『不完全』よ。これ、全部をいろはに変換しちゃつたら、見てわかる通り意味の通らない文章になる。『不、完全』なんだから、どれかを元のまま残しておかなくいけなかつたの。

もうわかるよね？お父さんは、瀕死の状態で必死に暗号解読のためのヒントを残した。それが片仮名の『シ』だったのよ！ いろはを使ってメッセージを残すなんて――

古典の先生だつたお父さんらしいじやない、と続けるつもりだつたのか、末尾が震えてよく聞き取れなかつた。私の胸に溢れる、真史の深い想い。知らず、熱いものが胸の底から湧き上がつてくる。

「……ほら、これがお父さんがお母さんに伝えたかつたこと、だよ」

『とはにいとろいシボヘ』
——永遠に愛しい志穂へ。

手の甲で涙拭いながら、オルゴールと共に和音が差し出した楽譜には、解説したそのままの文章が彼女の字で記されていた。

私は思わず顔を両手で覆つた。涙が掌を伝い、頬や頸を濡らす。漏れる嗚咽を抑えることができない。席を立つて私の後ろに回り、そつと肩を抱いてくれる和音。多分娘は、このメッセージの真の意味にまだ気づいていない。

『凄いよね、お父さん。お母さんのこと、本当に愛してたんだね……』

思つようにも声も出せず、こくこくと頷くことしかできなかつた。そう、真史は本当に私を愛してくれていた。

私のことを、しっかりと見据えてくれていた。

「……あの人は、わかつてたのね。その上で、すべてを許すつもりだつたんだわ」

「……何が？ どういうこと、お母さん」

少しずつ落ち着きを取り戻し、ぐしゃぐしゃになつた

「じゃ、じゃあ、お父さんは……」「そう、あなたが今くらいの年齢になる頃には、このメルゴー^ルを手作りしてまであんな手の込んだメッセージを残したんだと思う？」どうして十五年も先に来る、あなたの中学卒業の時期を指定して『家族みんなで聞けますように』なんて書いたんだと思う？」

娘は潤んだ目のままで小首を傾げた。しゃつくりを一つ挟んで、私は続ける。

「お母さんは、オルゴールを一度聴いただけで、ずれた音のテンポや音階を読み取る力はないわ。現に何度聴いても、ずつと事故のショックで壊れたんだと思つていいものね。そしてそれは、お父さんももちろん知つていいはずなの。ずつと小さい頃にピアノをやめてしまつて、そういう訓練はしていなかつたから。

「だからね、オルゴールに隠されたこの一文は、お母さん一人じや、読み取れないよ、うに作つてあるの。暗号を解くより先に十個の音のずれと、その音階を判別する必要があり、誰か音感に優れた人が一緒に聴かない限り、それはわからない」

和音の目が大きく見開かれる。ひゅうつと息を呑む音が聞こえた。

仕掛けに気づき、音を拾い上げる和音。

現れた十の音階に、首を捻る私と娘。

その横で、優しく笑いながら二人を見つめる真史。
『ヒントをあげようか。シ、だよ、シ』
そんな風景を、夢見て。

あなた。

どうしてあなたは、そんなにも残酷なの。

どうして二度と会うことができない今になつてもなお、あなたを愛させようとするの。

会いたい。

会いたい。

泣き崩れ、息もできないくらいの胸苦しさに喘ぐ私の

背中を、あたたかな掌がさすつてくれた。

顔を上げると、大粒の涙をぽろぽろと零した和音がこちらを見つめている。

その顔に、真史の安らぎに満ちた微笑みが重なつた。